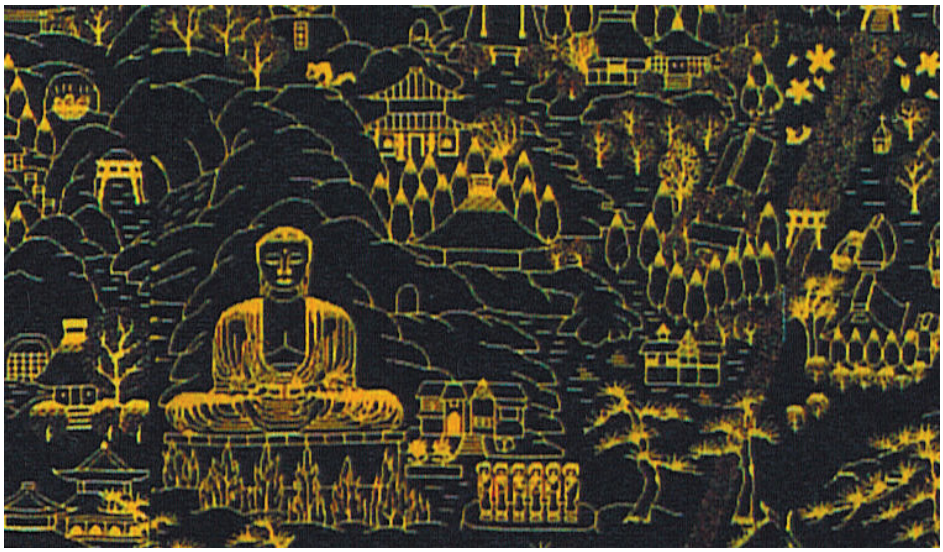
News! the 世界遺産

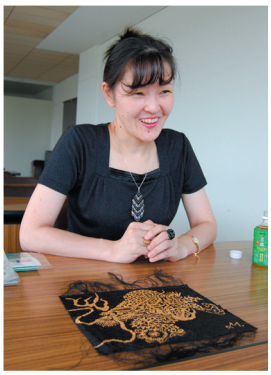
鎌倉世界遺産候補地をビーズ刺繍で表現～米国で初個展

世界遺産を目指す鎌倉を世界に知ってもらうことが重要性を帯びてきました。かつてのミス鎌倉の金谷美帆さんは、206 万粒のビーズを使って、「現代鎌倉絵図」を制作、今秋、日本大使館の協力を得てワシントンの日本大使館広報文化センターで個展が開かれ、国際デビューを果たしました。



「現代鎌倉絵図」（一部）　総ビーズ織り六曲屏風

絵図は横 3 メートル、高さ 1.8 メートルの大作。横幅 50 センチずつ 6 枚の短冊型で 3 年がかりで制作しました。地は黒のビーズで渋く仕上げ、金色のビーズで鶴岡八幡宮、建長寺、円覚寺、鎌倉大仏など世界遺産候補地となっている史跡の大半を織り上げました。日本最古の築港跡である和賀江嶋は三艘の帆掛け舟で表現しています。鎌倉の史跡の特色である一升桝遺跡や北条氏常盤亭跡など埋蔵遺跡については、構成が煩雑にならないように除外しました。



ビーズ作品を前に語る金谷さん。

「ケーブルテレビのアナウンサーを伊豆でやっていて、給料制で洋服を買えなかったので、ビーズのアクセサリーを作ってお洒落のファッションにしていました。仕事に行き詰ったときに、家に引き籠ってできることは何かなと考えたものです」

まずビーズを織って着物に挑戦しました。春夏秋冬 4 枚の着物の連作の中で秋の絵柄のものは、熱海の能舞台で披露されました。源平池のハスに続いて、右目を射られながらも奮闘したという平安末の武将・鎌倉権五郎景正（政）の顔を歌舞伎絵で織りました。

「鎌倉全体が 1 枚の作品でわかるようなものを作ってみたかった」というのが、鎌倉絵図制作の発想でした。金谷さんは神奈川県有数の進学校である県立湘南高校から学習院大学に進みました。浄光明寺住職だった故大三輪龍彦さんは、高校、大学の数少ない先輩で、それが縁となって私淑しました。大三輪さんは鎌倉の世界遺産登録推進者の一人で中世史学者でした。生前、鎌倉時代の地形復元などにかかわっており、絵図制作のヒントをもらいました。

芸術館で総ビーズ織り着物の展示をしたとき、見学者の米国の日本大使館関係者からワシントンでの展示の打診を受けました。2010 年に鎌倉が世界遺産に登録されるかも知れないという話が出ていたときで、登録にあわせて絵図を作っていこうと漠然と考えていました。ワシントン展が決まると、制作にも熱がこもってきました。正確なイメージを固めようと、2 年かけて世界遺産の候補地になっている鎌倉の神社仏閣を回り、写真を撮ったり、スケッチを重ねて下絵を描きました。そしてワシントン展が決まったのです。

「世界的に見ても頼朝が幕府を置いた 1100 年代に天皇家とか貴族ではなく、武家が権力をもって国を統治したというのは、すごいことだと思います。徳川幕府滅亡まで 700 年間、幕府体制が続いたことを再評価すべきです。フランス革命とか、米国の独立戦争などよりはるかに前に武家による革命が歴史を動かしたのです」

金谷さんは制作を通して学んだ鎌倉の世界遺産としての真価を語りました。オリジナルな技法を駆使して鎌倉を描くアーティストの感性は果てしなく羽ばたいていくでしょう。